

# 現代人にとって宗教改革の意味は?

李 恩 子

NHKのドキュメンタリープログラムの一つに「その時歴史が動いた」というものがある。多くの人が聞いたり観たりしたことがあるはずだ。たまたまではあるが、私も何度か観た事がある。

歴史的・人物の秘話などを紹介するこのプログラムはへたな学問書を読むより勉強になることがある。番組内容の良さもさることながら何といってもこのタイトルを見るたびある種の感慨にひたる。自分の生と直結する過去の様々な歴史的「事件」が思い起こされ、胸が熱くなるのだ。

現代人の宿命か惰性か、日常生活の忙しさに追われる私たちは、その日常的課題のなかで流され、あるいは満足し、往々にして自らが歴史的存在であるということを忘れがちになる。だが、このようなタイトルに触れると、あらためて歴史とのかかわりとは何なのだろうか、もっと言えば、私たち一人一人がどのように歴史にかかわるべきなのかという内的質問を喚起させる。

16世紀、ヨーロッパ中世末期に宗教改革の源流をなしたマルティン・ルターが残した有名な言葉の中に「ここに私は立つ」というものがある。短いこの言葉の中にルターの信仰の深さと意思の強さを読み取ることができる。

人間が持つ資質の中で最も崇高なもの一つが「意思・will」だと言われるがそれはどのようにすれば、鍛錬され研磨することができるのだろうか?

未踏の分野で新しいことに挑戦する意思、権力に迎合しないで古い弊病を改革しようとする意思、自己の内面を省み、その矛盾を克服しようとする意思、足元の様々な問題を一つづつ、丁寧に応答し変革していくこうとする意思などなど、私たちが能動的に行動を起こし、改革し、チャレンジしていくべきことは山ほどある。

10月31日を宗教改革記念日として祝うプロテスタント教会の教派、またいくつかの国ではこの日を休日としているところもあるが、「改革」の意味を宗教にのみ限定せず、私たちが歴史に向き合う存在として今なにをすべきなのかを考えさせる記念日でありたい。

(国際学部准教授・宣教師)